ブリトニー・スピアーズ　去勢執行③

Britney Spears - Pop Tart, Ball-Buster by Number 2

7　ルール変更

ブリトニーは立ち上がると、部屋を出てバスルームへと向かった。

バスルームで数分を過ごした後、再び部屋に現れた彼女は、テックスの血液や体液を洗い流し、リップスティックを塗り直し、髪の毛を整えていた。掌に載せた二つの「玉」を弄んでいた。洗面台で、二つの「玉」も洗浄したようだ。

彼女はベッドサイドに立ち、女たちに向かって訊ねた。

「これな～んだ？　イアリングかなぁ？」

「違うよ～！」

女たちが叫び返した。

「じゃあ、ブレスレットかしらぁ？」

「ちが～う！」

「それじゃなぁにぃ！」

「き・ん・た・ま！！！！」

女たちは叫び、それから手を叩いてわらい転げた。ブリトニーは、ベッドの上の2人のダンサーに1個ずつ、「玉」を投げてよこした。ダンサーたちはきゃっきゃっと喜んで、初めて見るらしい男の「玉」を眺め、いじくりまわしていた。

「それあげる！　ボーナスよ！」

ブリトニーは言った。

それから彼女は、残る四人のダンサーたちに向かい、彼らをしげしげと眺め回した。

カルロスがおずおずと口を開いた。

「あの……そろそろ、鎖をはずしてくださいませんか、ミス・スピアーズ」

彼女は、ゆっくりと彼に近寄り、そのペニスに指を絡め、弄びながら呟いた。

「どうしよっかなあ……」

「で、でも……去勢するのは1人だけって、お約束でしたよね……、もうテックスをやっちゃったんだから、だから……ゲームは終わりなんじゃ……」

デビッドも、カルロスと同じ思いだった。やっと悪夢が終わった。彼はテックスの代わりに、彼女のバックダンサーとして雇われる。

彼女はテックスを嫌っていた。最初からテックスだけを去勢するつもりだった。他の4人はエキストラにすぎないのだ、と。

だが、ブリトニーの次の言葉は、男たちの予想を裏切った。

「たしかに、そんな約束したっけね。でも、やめた。約束破らせてもらうわ」

男たちはいっせいに口を開き、抗議した。だが、ブリトニーはたちまち笑顔をひっこめ、鋭い目つきで男たちを睨み回した。

「気が変わったの、文句ある？」

四人はさっと口をつぐんだ。

「5人のうち、1人だけ金玉なくなるってルールだったわね。でも、今からルール変更よ。玉をとられずにすむのは1人だけってことにするわ」

男たちは呆然と口を開けたままだった。

彼ら4人のうち3人は、テックスと同じ運命を辿ることになったのだ。

「そんなばかな！」

スキンヘッドの黒人、ダリウスが叫んだ。
「約束が違うよ！　あんたはもうテックスの金玉を引っこ抜いた。ゲームはもう終わりだぜ！」
小柄なブリトニーは、真っ黒な肌の大男を見上げ、不快な表情で聞いていたが、いきなり彼の睾丸をつかんでひねりあげた。
握りつぶしてしまわんばかりに力をこめていた。ダリウスの叫び声が引っ込み、口だけがぱくぱくしていた。
「誰に向かってタメ口聞いてるの！　私はブリトニー・スピアーズよ！　したいことはなんでもやるの！　したいことはなんでもできるの！　私は、あんたらクズどもが1年かけて貰えるお金を、一晩で稼いじゃうんだからね！　私は小さいときから、がんばってここまでのしあがってきたの！　今じゃ、世界中の男どもが私を妄想しながらオナニーしてる。その地位を努力して勝ち取ってきたのよ！　あんたらみたいな怠け者とは人種が違うの！」
ブリトニーは憎々しげに、ダリウスの苦悶に満ちた顔に唾をはきかけた。
「次はあんたの番よ、ダリウス」
その瞬間、ダリウスの顔に、後悔の念がありありと浮かんだ。

8　闘犬ゲーム

「ダリウス、あんた、闘犬って知ってる？」
ブリトニーはダリウスの睾丸から手を離し、歩み去りながら訊ねた。
闘犬、という言葉を聞いたとたん、ベッドの上にいた背の高いアジア系ダンサーのポーラが、甲高い声で叫んだ。
「あら、ブリット！　あなた自身が、かませ犬をやるわけ？　それ楽しみ！」
デビッドは、その意味を理解できなかったが、なにやら不吉な予感がした。ダリウスも、彼と同じ思いらしかった。
ブリトニーは、テーブルの上の小さな瓶を取り上げ、ダリウスに歩み寄り、彼のたくましい黒い脚と脚の間に膝まずいた。そして、小瓶からジェルのようなものを掌にとり、ダリウスの陰嚢に塗り、ていねいにすりこみはじめた。
ダリウスは怯えた眼で、作業をつづける彼女を見下ろしている。

やがて彼女は、ダリウスの陰嚢から手を離し、しばらくじっとそれを見つめた。
ダリウスも不安げに、彼の陰嚢を見下ろしている。
一分ほどたった。ダリウスが、奇妙な顔つきで、下半身をもぞもぞしている。陰嚢に何か異変が起こったようだ。
「金玉が、あったかいでしょ？」

ブリトニーが悪戯っぽい笑顔で言った。ダリウスが頷いた。
「男の玉って、熱を帯びるとどうなるか、知ってる？」
デビッドは、ダリウスの陰嚢を見つめた。皮の皺がしだいに広がり、同時に陰嚢全体がだらりと延びていった。それにつれて、睾丸の位置も次第にさがっていった。
おそらく、あのジェルは、筋肉を熱して伸ばすバーム剤だろうとデビッドは思った。
数分後、ダリウスの睾丸は、通常の位置よりも１０センチ近くも下がってしまった。
ブリトニーは、これでよし、というように、口を大きく広げ、彼の陰嚢に唇を押し当てた。ダリウスの３０センチのペニスは、彼女の顔によって持ち上げられた。

彼女は、ダリウスの股間に顔を埋めたまま、首を揺すったり、顔の位置を変えたりしながら、何やらもぞもぞ動いていた。
よく見ると、彼女は、ダリウスの睾丸を口のなかに呑み込もうとしていたのだ。
ダリウスはちょっと驚いた表情を見せ、それからちょっと全身を痙攣させ、目を閉じかけた。
どうやら、とても気持ちがいいらしい。
ブリトニーは必死に二つの睾丸を呑み込もうと口を思い切り開けていたが、ダリウスの腫れ上がった睾丸は、なかなか呑み込めなかった。睾丸は陰嚢のなかで、あらぬ方向に転んでいき、ひとつだけなら呑み込めても、二つ目を呑み込もうとした瞬間に口から飛び出したりした。

やっと二つ呑み込むまでに、数分を要した。
彼女は、せっかく呑み込んだ睾丸を逃すまいと、陰嚢の根元をしっかりと歯でくわえた。
ダリウスは、それを見て怯えたように、背をそらした。
腫れ上がった睾丸を呑み込んだブリトニーの頬がぷっくりと膨らんでいた。息をするのも苦しいらしく、鼻孔が激しく開いたり閉じたりしている。頬が紅潮していた。
ぜいぜいと肩で息をしながら、彼女は両手を床につき、四つんばいになった。大きな乳房が、床に触れんばかりに垂れ下がった。

この間，ダリウスは対照的に、快楽に包まれ、目を閉じ、やはり荒い息をしていた。
彼の股間に、小柄な少女が膝まずき、口で睾丸を愛撫しているのだ。彼女が口を動かす度に、額の上にのっているペニスもまた、刺激されるのだ。
だが、デビッドの脳裏に、「かませ犬」という言葉がよみがえった。
いま、ブリトニーは犬のように、ダリウ

スの睾丸をくわえて四つんばいになっている。
あっ。彼は、ブリトニーが何をしようとしているのか、はっきりと悟った。次の瞬間、ダリウスが雄叫びをあげた。

思ったとおりだった。
突然、ブリトニーは頭をぐっとそらした。
彼女は、ダリウスの睾丸を噛みちぎるつもりなのだ！
ダリウスは尻を後ろに引き、身悶えしながら必死に逃げようとした。
だが、ブリトニーは獲物に噛みついたブルドッグよろしく、くわえたまま離れようとはせず、後方に下がろうとする。
ダリウスの膝が大きく開き、尻が落ち始めた。彼は少しでも苦痛を軽減しようと、彼女が後ろに下がるのに従って、前ににじり寄ろうとした、
だが、ダリウスの背後で、ベッドに座っていた長身の金髪、女性ダンサーのタラが、にやにや笑いながら、彼の後ろに回した両手首をしっかり掴んだ。
ダリウスは前に進むこともできなくなった。

ダリウスが固定されたのを見たブリトニーは、顔を左右に振ったり、後ろにのけぞったりして、

彼の睾丸を責め苛みつづけた。
彼女の動きはしだいに荒々しく凶暴になっていった。犬が前足を踏ん張って、何かを噛みちぎろうとするように、床についた両手を踏ん張り、顔をそらせ、お尻を後ろに突き出した。
ジェルを塗られたダリウスの陰嚢はますます伸び、もはや２０センチちかくも彼の胴体から離れていた。
するとブリトニーは今度は、ダリウスの睾丸に歯をあて、かみ砕きはじめたのだ。
ダリウスは絶叫した。
彼は必死で身をよじり、背後で彼を押さえつけているタラに向かって怒鳴った。
「頼む！　手を離してくれ！」
彼は苦悶の表情で懇願した。
「お願いだ！　仲間じゃないか！」
「あなたと私が仲間？」
タラはその顔に、唾をはきかけた。
「ばか言わないでよ、汚いくろんぼのくせに」
ダリウスの顔が絶望で歪んだ。
ブリトニーは、両手を床から離し、ダリウスのたくましい両脚をつかみ、激しく顔を揺すった。
ダリウスは絶叫し、顔を天井に向けて激しく痙攣した。

「ちくしょおおおお！！！！」
彼は涙をこぼし、歯を食いしばって左右に首を振った。
「この、雌犬！」
ダリウスは、もはや逃げられないと観念したのだろう。苦悶の表情を見せつつ、彼女を罵りはじめた。
「うぎゃあああ！！！……てめえなんか歌手じゃねえ！！　……ステージじゃいつも口パクじゃねえか！　ぐわぁぁぁぁぁ！！！……お前なんか、お前なんか、胸が大きくなかったら、誰も見向きもしねえよ……あがあああ！！……しかも、その整形で膨らませたんだろうが！」
ブリトニーは憎々しげな表情を浮かべてダリウスを見上げながら、ますます歯を睾丸に食い込ませた。
だが、ダリウスは罵るのをやめなかった。
「この……くせえオマンコの……バカ女が……ぎゃあああああ！！！！！！！」
彼の睾丸はみるみる腫れ上がり、今にも破裂しそうだった。
だが、それでも大柄な黒人は、罵りつづけた。
「俺は知ってるぞ……なんでお前が、ジャスティンから捨てられたか……」
ブリトニーはかっと怒りの眼を見開き、ダリウスのペニスをつかんで爪を食い込ませた。破れた皮から鮮血が吹き出した。

「要するに……あいつはおまえのカラダに飽きたのさ！……ぐえええ！！！……全身整形だらけのくせに、ベッドのなかじゃマグロだからだ……、満足にフェラチオもできねえからだ！……ごぁあああああああ！！！！！！」
おそらく、ダリウスの台詞は嘘だ……デビッドはそう思った。
彼女は、口のなかに二つの睾丸を含み、巧みに責め苛んでいる。だとすれば、口に含んだペニスに快楽を与えることも巧みなはずだ……。

ブリトニーの顎が痙攣していた。
彼女もそうとう苦しいはずだが、絶対に口を離そうとはしなかった。まるで、ここで口を離しては、負けだというように。
平気でルールを変える彼女だ。ここで、口を離しても、後で必ず彼女はダリウスを去勢するだろう。
ナイフで切るか、バットで殴り潰すか、フェラーリで睾丸を轢き潰すかして。
だが、彼女はやめなかった。両脚を折り畳んで正座し、態勢を整え、口蓋を思い切り広げ、がぶりと睾丸に歯を食い込ませた。
ぐしゃ！！！！
肉塊の破裂する音が、室内に鳴り響いた。

一瞬の静寂の後、建物全体を揺るがす咆哮が轟いた。
「うぎゃあああああああああああ！！！！！！！！　神様ぁあああああああ！！！！！！！」
ダリウスの全身が硬直し、顔が天井を向いていた。
このホテルの内部にいた人間全員が聞こえるような、大音量の悲鳴だった。
……これを聞きつけて、誰かが警察を呼んでくれないか。
デビッドは、ひそかに念じた。

ブリトニーは、彼が完全に意識を失う前に、もう一つの睾丸を潰してしまおうと、すばやく行動した。
彼女はもう一つの睾丸に歯をたて、一気にかみ砕いたのだ。
同様の破裂音が鳴り響き、ダリウスは同じように硬直し、同じような悲鳴をあげたが、悲鳴じたいには先程のような力はこもっていなかった。
ダリウスの体は左右にゆらゆらと揺れ、仰向けにたおれはじめた。
ブリトニーは、彼の股間に食いついたまま、ぐいと上半身を後方にそらせた。
ぶちっと肉の裂ける音がして、ダリウスはばたりと倒れ、後ろのタラによりかかり、そのまま動かなくなった。
その股間には、ペニスしか残っていなかった。

ちぎられた陰嚢とその中身は、すべて彼女の口のなかにあった。
突然、重心を失い、ブリトニーも仰向けに倒れた。

彼女はゆっくりと起き上がった。
血まみれの顔を三人のダンサーたちに向け、ぺっと勢いよく、口のなかのものを吐き出した。
ぐしゃぐしゃの肉塊が、カルロスの足元に叩きつけられた。
つづいて彼女は、タラに支えられているダリウスの股間に顔を寄せ、大きく口を開いた。
血まみれの口のなかで、白い歯が光った。
彼女はダリウスのペニスを飲み込み、陰茎に歯をたて、がぶりと噛みついた。
血が勢いよく噴出し、彼女の顔に迸った。
彼女は、両手でダリウスの両脚をしっかり抱き抱え、ぐいと頭を後ろに引いた。
ぶちっと音が響き、３０センチの偉容を誇ったダリウスのペニスは、半分を残して持ち主の体から離れた。
「ぺっ！」
彼女は口からペニスを吐き出した。それは宙を舞い、数メートル離れた床に落ちた。
彼女は立ち上がり、肩で荒く息をしながら、２０秒ばかり動かずにいた。

ダリウスは、タラにもたれ、白眼を剥き、細かく痙攣していた。口から血反吐が垂れていた。
彼女は、しばしダリウスを一瞥していたが、誰に言うともなく、「縛って止血して」と言った。
椅子に座って自慰に耽っていたキキという赤毛の小柄なダンサーが立ち上がり、紐を手にしてダリウスの股間に膝まずき、大量の血を浴びながら、半分食いちぎられた彼のペニスの根元を縛った。
ブリトニーは、もう一度、バスルームに消えた。
数秒後、バスルームから甲高い叫び声が響いてきた。
「ちぇっ！！　髪の毛まで汚れちゃった！」

9　危うし、デビッド

２０分ほどたったのち、ブリトニーはバスルームから戻ってきた。その間、シャワーを浴びる音や、ドライヤーをかける音が響いてきた。
戻ってきたブリトニーは、前にくらべて髪の毛がすこし膨らみ加減で、メーキャップも簡単なものになっていた。やはり、メーキャップアーティストなしでは、通常見せているメークはできないのだろう。
だが、何より大きな変化は、彼女はパンツをはいていないことだった。ブーツと、首に巻いた

スカーフと、胸にさげた眼鏡だけが、彼女が身につけているすべてだった。
乳房も陰部もされだした彼女の姿は、信じがたいほど、ホットだった。
デビッドのペニスは、さらに固くなり、痛みさえ伴った。ジーンズを破って飛び出すのではないかとさえ思われた。

ブリトニーは、まっすぐにデビッドに向かって歩み寄ってきて、彼と並んでソファに腰をおろした。脚を組み、右手を伸ばして彼のブラウンの髪の毛をいじりまわし、踵を彼の股間に載せ、優しくジーンズの上からペニスを刺激した。
数分ほど、互いに無言だった。ブリトニーは、衝撃で硬直したデビッドを性的に刺激しつつリラックスさせようとしたのかもしれないが、その悪戯っぽいめつきは、たんに彼をからかっているようにも思えた。
ついに彼女から口を開いた。
「あなたってかわいいのね」
デビッドは笑みを返そうとしたが、股間に載せられた彼女のブーツが、いつ彼の睾丸を襲う凶器になるかと思うと，顔が引きつるだけだった。
「いい体してそうだし。農場で鍛えたからね」
彼女は笑った。邪気のない笑顔だったが、デビッドの緊張をほぐすほどではなかった。

「私の体、すき？」
彼女が訊ねた。デビッドはどう答えるべきか、迷った。彼女はかまわず続けた。
「私も小さいころから、鍛えてきたのよ」
デビッドはやっと頷いた。
「そうですよね……」
「やだ〜、かわいくなぁい」
彼女は甘えるような声を出し、少し体を後ろにずらし、片足をあげて、もう一方の脚の膝に載せた。彼女の陰部が、丸見えだった。その部分は、愛液で濡れていた。陰唇は膨張し、赤みを帯びている。二人の男を去勢したことが、彼女にどれだけの性的な興奮をもたらしたか、デビッドは悟った。
彼女は、指を唾液で濡らし、彼女の内部に滑り込ませた。
「デビッドは、今までに何人の女の子と寝たの？」
彼女は訊ねた。彼は答えた。
「2人……です」
「うそ！」
彼女はのけぞった。
「本当ですよ……1人はハイスクールにいたころ付き合ったコで、もう1人はコンサートで知り

合って、一晩だけ……」
「信じられない……それじゃ、私が寝た女の子のほうが、はるかに多いじゃない！」
え……。今度はデビッドが驚く番だった。
「で、でも……あなたは公言してましたよね。その……結婚するまでは、処女を守るって」
ブリトニーは吹き出し、哄笑した。三人の女性ダンサーたちもお腹を抱えて笑っている。
「ミス・スピアーズが……処女ですって！！」
赤毛のキキが身をよじった。
「両手両足の指合わせても、足りないくらいだよね！」
ブロンドのタラが、声を張り上げた。その譬えが気に入らなかったらしく、ブリトニーはきっと彼女をにらんだ。タラはたちまち口をつぐんだ。
彼女はソファから立ち上がり、デビッドに向かって「立って」と命令した。
デビッドはすぐに立ち上がった。彼女はテーブルに歩み寄り、装飾品をすべて外してテーブルに置いた。それからハンカチを二つ手にして、デビッドに近寄った。
「あっちを向いて」
彼女の命令に、デビッドは従った。ブリトニーは、すばやく彼の左手首にハンカチを巻き付け、同じように右の手首にも巻いた。そして二つのハンカチを結びつけた。デビッドは、両腕を後ろ

手に固定された。
「こっち向いて」
デビッドはすぐに彼女に向き直った。
彼女は、デビッドのベルトに手をかけ、起用に外した。つづいてジッパーがおろされ、ジーンズとブリーフが足首までずり下ろされた。
むき出しになった彼のペニスを見つめながら、ブリトニーが満足げに微笑んだ。
「２０センチはあるよね」
彼女はそれをつかみ、さっとしごいた。
「それに太いし」
彼が答える間もなく、彼女は両手で彼の胸板を撫で、それからシャツを左右に引っ張った。ボタンが弾け飛び、上半身があらわになった。
彼女は、デビッドの厚い胸板に爪をたて、さっと引っかいた。やわらかな肌に、赤い爪痕が縦に線を描いた。
それから彼女は、彼をソファに押し倒した。両手を後ろ手に縛られ、両足首をジーンズとパンツで拘束されたデビッドは、あらがうこともできず、彼女にのしかかられた。
デビッドのペニスは、彼女の熱く濡れた陰部と、彼自身の下腹部の間に挟み込まれた。
彼女はデビッドの首に両腕をまわし、彼の顔を自らのやわらかな胸の谷間に押しつけた。その

姿勢で、お尻を上下させた。熱く濡れた陰部が、デビッドのペニスを刺激した。
デビッドは天国にいるようだった。小柄で暖かで引き締まったボディが、彼にぴったりとくっつき、喘ぐような息を吹き掛けてくる。
彼女はデビッドにキスし、舌を入れてきた。巧みに彼の歯茎を刺激し、舌同士をからめてくる。
デビッドは思わず彼女を押し倒し、犯したくなった。だが、できなかった。
彼女の果てしない残忍さを見せつけられたばかりだ。デビッドの行動ひとつで、どんな目に合わされるかわかったものではないのだ。
彼は、おとなしくじっと、彼女になぶられるままでいた。
ブリトニーは顔をあげ、じっとデビッドを見つめた。小さな丸顔が、すぐ間近にあった。
彼女は手を伸ばし、彼のペニスを握りしめ、その尖端に自らの陰部をあてがい、ゆっくりと沈めた。ペニスの半分が、彼女の肉唇に覆われた。
「あああ……」
彼女は溜め息をもらした。あいらしい美貌が、半ば快楽に、半ばは苦しげに歪んだ。
そのまま、彼女は上下に運動をつづけた。
「前戯はいらないんですね？」
彼のつぶやきに、ブリトニーは彼のペニスにまたがったまま、上半身を起こした。
「どういう意味？」

彼女は微笑み、５メートルばかり向こうの、床に転がった２人の犠牲者を見やった。
「男の玉を潰すことが、私には最高の前戯よ」
デビッドの顔がさっと硬直したのを見て、ブリトニーはにっこりし、ますます激しく、腰を上下させた。
うめき声にまじって、悲しげな悲鳴が、官能的な唇から漏れた。
「あああ……そうだ、忘れてたわ……」
彼女は腰を動かしながら、上半身を折り曲げ、デビッドの耳元で囁いた。
「もし射精したら、去勢するからね……」
デビッドは衝撃を受けた。
彼女の小さな肉体がもたらす快楽が、一瞬にして拷問に変わった。
彼のペニスに蓄積された欲望は、いまやその捌け口を求め、吹き出す寸前だったのだ。

「わかった？」
彼女は今度は大きな声で言った。
「は、はい……」
「復唱して」
「もし射精したら、ぼくを去勢する、と」

「そう。あなたのおちんちんに、よく言い聞かせておいてね」
「はい」
「なんて、言い聞かせるの？」
「……もし射精したら、ちょん切られるぞって……」
「おちんちんだけじゃないわよ、あんたの金玉だって……」
「は、はい」
「復唱」
「はい……もし射精したら、金玉を潰される、と」
セックスの最中に男女がかわす会話としては、異様なものだった。
彼の眼に涙が浮かび、頬をつたった。
テックスやダリウスが辿った運命が自分にもふりかかってきているのだ。
「オッケー」
デビッドの涙に、ブリトニーは満足げに頷き、今度は根元まで腰を沈めた。２人同時に快楽の叫びをもらした。
「ああ、いい！」
最初はゆっくりと、そして次第にペースをあげ、彼女はデビッドの肉棒を味わった。
彼の頭部を両腕できつく抱きしめながら、激しく腰を動かした。デビッドの口は、彼女の乳房

で覆われ、息もできなかった。

数分後、彼女の動作はますます激しくなった。デビッドのペニスは、尖端まであらわになったり、根元まで覆われたりした。

「ああ……デビッド……射精しちゃだめよ……あなたのおちんちん最高！……かみ切ったりしたくない……だから、絶対……漏らしちゃだめ……」

彼女は快楽に喘ぎ、きれぎれに呻き、叫んだ。

数分後、彼女は制御機能を喪失し、快楽に任せて肉体を暴走させはじめた。

上下に、左右に、押したり、引いたり、身をよじり、腰を回転させ、デビッドのペニスからあらゆる快楽をむさぼろうとした。あたり構わず叫び、むせび泣いていた。

一方のデビッドは、射精すまいと必死だった。

彼女の脅迫が、ジョークでないことは明らかだ。その意味で、いまデビッドの下半身にもたらされている至上の悦楽は、もっとも残酷な拷問と同じだった。

彼は目を見開き、２人の女性ダンサーが、ベッドの上でテックスの睾丸でキャッチボールしている様を見つめた。少しでも他のことに気をそらさなければならなかったのだ。

彼は必死で脳裏に思い浮かべた。野球の事、すっぱだかのママ、すっぱだかのおばあちゃん、

すっぱだかのマーガレット・サッチャー……。やる気の萎えるものならなんでもよかった。

「はぁぁああん！！　はぁぁああん！　はぁぁああああ～ん！」

だが、彼におおいかぶさる小柄な女性の発するセクシーなあえぎが、彼の想念を打ち砕いた。

彼女は、頂点に達しようとしていた。

白眼をむき、唇から涎を垂らし、全身が間断なく痙攣していた。

唇が大きく開かれ、絶叫が迸った。

「ああ！！　いい！！　そうよ……そうよ！……ああああん、もっと！……漏らしちゃだめよ……切っちゃうからね！……潰しちゃうからね！！……もっとほしい！……ああん、ああん！」

ぎゅううっと、彼女の陰部が、きつくデビッドのペニスを締めつけた。まるで、噛みちぎられるような痛みを感じた。

だめだ……もう限界だ……。

彼のペニスに溜まりに溜まった欲望が、捌け口を求めて暴れていた。彼女の肉唇の痙攣が、激しい刺激を与えて来る。

彼は歯を食いしばり、全身を硬直させ、必死に射精を押さえつけた。

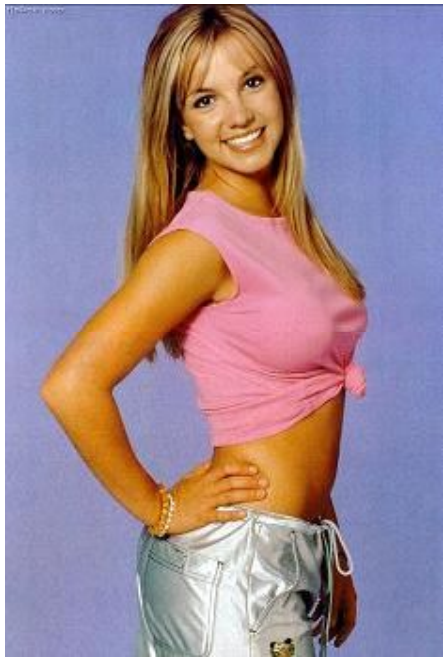
やがて、彼女は突然、その動きを止めた。ゼンマイのきれた人形のように、ばったりとデビッドにおおいかぶさったブリトニーは、肩で息をしながら、うわごとのように、彼の耳元で囁いた。

「なんてこと……よかったよ……すっごくよかった……ああ……よかったよ……」

柔らかな声音だった。
彼女の全身は、まだオルガズムから立ち直っていないかのように、細かく痙攣していた。
ふとブリトニーは顔をあげ、うつろな眼でしばしデビッドを見つめ、それから唇を彼の唇におしあてた。
「ありがと……」
いったん唇を離して、そうつぶやき、再び唇を押し当て、今度は舌を入れてきた。

数分後、彼女は楽しげに笑いながら，上半身を起こした。
彼のペニスは、まだ彼女の肉唇に突き刺さったままだった。
「すっごくよかったよ」
彼女はすでにオルガズムから立ち直っているような、穏やかな表情だった。
「何度かイキそうになったみたいだけど、よくがんばったね」
彼女は、顔を近づけ、キスしながら囁いた。
「切らずにすんで、よかったわ」
舌が入ってきた。彼女はふたたび、全身を上下に動かし始めた。驚いたように見上げるデビッドに、ブリトニーは言った。
「まだ、終わってないわよ。それと……射精したら切っちゃうってルールはまだ生きてるからね」

それから２０分、デビッドは彼女に犯されつづけた。
ブリトニーは四度、絶頂に達した。
デビッドもまた、同じくらいの回数、危うく射精寸前に達した。
いったん絶頂に達した彼女は、１分ほどの休憩時間をとる。この間になんとか、「冷却」させることで、デビッドはピンチを切り抜けた。



ついに、ブリトニーは果てた。
彼女は、デビッドの体の上から転がり落ちるように離れ、床に寝そべった。
デビッドは汗まみれで、ソファに取り残された。屹立する彼のペニスは、溜まりに溜まったものを吐き出してくれと懇願するように、ひくひくと動いていた。
それは、耐えがたい拷問だった。

デビッドは、すぐにも手でしごきたかったが、後ろ手に縛られているから、それもかなわない。たとえ、両手が自由だとしても、そんなことをすれば、生涯二度と射精できなくなってしまうかもしれないのだ。

床で失神しているブリトニーを見下ろした。彼女は白眼を剥き、かすかに痙攣している。

今なら、あのドアのところでふんばっているボディガードさえなんとかすれば、脱出できるんじゃないか。

そんな考えが頭をかすめた。

だが、アクションを起こす気にはなれなかった。無事に自分のアパートに帰れたとして、そこでセックスかマスターベーションをして、射精した瞬間、このブロンドの小柄な歌手が現れ、彼の睾丸をずたずたに引き裂いてしまうのではないか。そんな妄想がデビッドの脳裏を占拠していたのだ。

数分後。

ブリトニーが目を覚ました。目があった。ブリトニーは、ふるいつきたくなるような笑顔を浮かべ、うう〜んと伸びをしたり、床を転がったりした。

それから反動をつけて起き上がり、ソファに腰をおろした。それから、彼の唇にキスし、右手で睾丸をもてあそび、軽くひねったり、叩いたりした。強く叩かれたわけではなかったが、鋭い

痛みが走った。

デビッドは思わず顔をしかめたが、ブリトニーは気にもとめなかった。じっと彼の目を見つめながら、今度はペニスを握りしめ、上下にしごきはじめた。

うっ……。デビッドは身を固くした。

彼女は、無理やり射精に追い込もうとしている……。

ブリトニーは彼のペニスをしごきながら、床に膝をつき、股間に顔を近づけた。

口をせいいっぱい開けて、彼の欲望の昂りを呑み込んだ。

噛みちぎられる……。

デビッドは思わず目をつぶった。

股間を包み込んだ、柔らかな湿りけのなかで、急速に快感がたかまっていった。

ペニスの尖端が、彼女の喉の奥に突き当たり、きゅっと締めつけられた。

舌が、間断なく、陰茎の皮の継ぎ目を刺激する。

彼が経験したなかでも、もっとも巧みなフェラチオだった。

だが同時に、おそらくは、彼の生涯でこれまで味わったこともない激痛をもたらすフェラチオでもあるだろう。

デビッドは歯を食いしばり、出口をもとめて爆発しそうになっている彼の欲望を、必死で封じ込めようとした。

ブリトニーの唇が、彼の陰嚢を包み込んだ。
２０センチを越える彼のペニスはもちろん、睾丸を治めた肉袋までが、この小柄なブロンド美少女の口蓋に呑み込まれたのだ。
いったいどうやって？
いぶかしがる暇はなかった。彼の生殖器の敏感な部分はすべて、巧みな攻撃にさらされたのだ。
ブリトニーは、時々喉の奥でむせていた。鼻孔が、空気を求めて激しく動く。息ができないでいるのだ。苦しげな痙攣が、彼のペニスにも伝わり、それがますます快感を増幅させた。
やがて彼女は、激しく顔を上下させはじめた。彼の尻を両手でつかみ、ソファから持ち上げ、ますます深く股間に顔を埋めて来る。
デビッドの全身は快楽とそれを抑制しようとする筋肉の動きの板挟みとなり、はげしく震えた。
快楽の喘ぎと叫びがこみあげ、口から漏れた。
彼女の爪が、デビッドの臀部に食い込み、血が吹き出した。
デビッドは何時の間にか、自ら股間を上下させ、彼女の口を犯していた。
……俺はいったい、何をやってるんだ？
彼女の思うつぼだ……このまま射精しちまったら、去勢されるんだぞ！

不意に、ブリトニーが顔をあげた。

「いったい全体、どうなっちゃってるの？！」
彼女は叫んだ。その顎に、ペニスの尖端がゆらゆらと当たっている。
「なんで射精しないのよ！　ここまでサービスしてあげてるのに！」
デビッドは思わず本音を呟いた。
「だって……射精したら、去勢されるんでしょう？」
「そんなこと考えてたわけえ？」
彼女は笑いだした。
「私がその気だったら、もうとっくに去勢してるわ。たとえ射精するのを我慢しとおしたとしても、あんたの金玉をすり潰して、ペニスをちょん切ってるわよ、とっくの昔に。でしょ？」
彼女の大きく見開かれた眼に吸い込まれそうだった。「でしょ？」という最後の言葉は、ひどく低音で響き、説得力を帯びていた。
確かにそうだ……。彼女は去勢したいと思えば、やる。現に平気で自分のつくったルールを破ってまで、二人の男を去勢した。
だとすれば、抗っても仕方がない。
ここは運を天に任せ、この世界中の男どもが彼女を思い浮かべて自慰に耽るポップスターの口のなかに精液をぶちまけるという、夢にまでみた好機を逃すのはもったいなさすぎる。
どうせ去勢されるなら、せめて彼女がもたらす快楽を味わいつくしてから、のほうがいい。

どう抗ったところで、彼はもう彼女の手中から逃げることは不可能なのだから。
さらにごくわずかな可能性として……彼女自身がつくったルールを破るという性質を発揮して、射精しても去勢しないよう方針変更することだってありえるだろう。
ブリトニーが再び、彼の股間に顔をうずめ、はげしく上下させはじめた。
デビッドは、再び襲ってきた快楽に、身も心も委ねた。
「あああああ……」
彼は歓喜の叫びを発し始めた。
「あああああ……、もっと、もっと……いく！」
次の瞬間、溜まりに溜まった鬱憤が炸裂した。上半身が激しく痙攣し、二本の脚は硬直した。
ブリトニーが、喉の奥にぶちまけられた精液にはげしく咳き込んだ。

電気に撃たれたように、しばらく脳裏を靄が覆っていた。
ぼやけた視界が徐々に焦点が合ってきた。
彼の足元に、口から溢れ出た精液にまみれた顔があった。
「よかった？」
ブリトニーは唇から垂れた白い液体をぬぐいもせず、微笑んだ。
「よかったでしょ？」

答える気力は残っていなかった。快楽と一緒にすべての体力を吐き出してしまったようだった。
さらに快楽が去った後、襲って来るかもしれない災厄が脳裏をかすめ、恐怖が思考能力をマヒさせていた。デビッドはやっとのことで頷いた。
ブリトニーは舌を出し、唇の周囲の精液を舐めた。
そして、再び彼のペニスを握りしめ、その尖端を口に含んだのだ。

萎えかけたペニスが再び怒張した。
だが、今度それを包み込んだのは快楽だけではなかった。
ブリトニーは、フェラチオしながら二つの睾丸をひねりあげはじめたのだ。
「うあああああ！！！」
デビッドは悲鳴をあげた。
彼女は気にもとめず、最後のひと滴を絞りとろうとするかのように、精巣を圧迫し、ペニスをしゃぶりつづけた。
……今度こそ潰される……。
涙が溢れだした。
だが、激痛と恐怖とは裏腹に、彼のペニスは破裂しそうなばかりに勃起していたのだ。
不意に、すべての快楽と苦痛が去った。

ブリトニーは彼のペニスから口を離すと同時に、睾丸から右手を離して立ち上がった。
「いい子ね」
彼女は微笑み、同時に彼の睾丸を蹴り上げた。
膝小僧が彼の睾丸を一瞬押しつぶした。
デビッドは呻き、ソファに仰向けに転がり、体を海老のように丸めて悶絶した。
ブリトニーは、一仕事終えたようなリラックスした表情で、シャンペンのボトルを取り上げ、ラッパ飲みした。
彼女はしばらく、ボトルの底を天井に向けたまま、その中身の液体を喉に流し込みつづけた。シャンパンは彼女の口から溢れ、みごとな乳房をつたって床にしたたった。

ブリトニーはシャンペンを飲み干すと、ボトルを床に転がして一息をつき、その視線を部屋の中央に向けた。
残る三人のダンサーたちに。
とりあえず、デビッドは命拾いしたようだった。